

「御魂振り」の神事

何千年もの間、石上神宮は再生、復活、蘇生の場所として知られてきた。この信仰の中心となっているのが、寿命を延ばし、死者さえも蘇らせると言われる「魂を揺さぶる」あるいは「魂を鎮める」儀式である。この神事（「鎮魂祭」、「御魂鎮め」、「布留の言」、「魂振り」など様々に呼ばれる）は、毎年 11 月 22 日と節分前夜の 2 回行われる。この神事は一般公開されている。

この神事は、物部氏の始祖とされる宇摩志麻遲命（うましまじのみこと）が訓示を受けたことに始まると考えられている。その父は邇芸速日命（にぎはやひのみこと）で、彼は人間界に降臨した際、天の神々から十種の神器を授かった。神々は、死者を復活させるため神器をどのように使用するかを彼に示した。

伝承によれば、邇芸速日の息子が初代天皇である神武天皇のための鎮魂祭を行ったという。それ以来、この神事と十種の神器は、皇室の健康と国の安寧を守る方法として物部氏に受け継がれてきた。

「魂振り」とは、人間の魂と神々の世界とを結ぶ糸である「玉の緒」に由来する。玉の緒は、人間の活力の源を表し、それを「振る」ことは魂を刺激し、健康を促進するという。国の健康と活力を維持するため、この儀式は太陽が最も弱く、土地が不毛になる冬に行われる。